

変容する言語島・白峰村の方言

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Kato, Kazuo メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/24673

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



- (1)「喜ぶ」「飲む」など、一部のバ行・マ行四段（五段）動詞の音便形が「喜んだ」「飲んだ」のような撥音便でなく、「喜うだ」「飲むだ」のようなウ音便となる。
- (2)味の表現で「塩味が濃い・塩辛い」ことをショーファイ、ショーワイなどと言う。
- (3)味の表現で「塩味が薄い」ことをアマイ、アーミヤなどと言う。
- (4)「地震」の意の古語「なる」に由来するナイやネー、「昨年」の意の古語「こぞ」に由来するコッゾなどが使われている。
- (5)共通語の「つ」にあたる発音がトゥのように発音される。

また、白峰方言の独自性を示す言語事象の代表的なものには次のようなものがあります。

- (6)自分のことをさす自称代名詞にギラが使われる。
- (7)感謝の意の挨拶ことば「ありがとう」に当たるものとしてヨシタイ、ヨーシタイ（「よくしたね」の意）が使われる。
- (8)別れの挨拶ことば「さようなら」にあたるノイノ（「のう、のうくねえ行こう」の意）が使われる。
- (9)虫や動物名の末尾にメを付け、イリメ（犬）、ヘンメ（蛇）、アリメ（蟻）などのように言う。
- (10)形容詞がアーキャ（赤い）、サービ（寒い）のように発音される。
- (11)加賀方言で「書いトル」（書いている）、「読んドル」（読んでいる）となるところが、書い Chol、読ん Chol のように「～ Chol・～ Chol」となる。
- (12)文末詞「ね」にあたるものが「暑かったニャー」のように～ニャーとなる。

このほかにも、白峰方言の古態性、独自性を示す事象は少なくありませんが、これらの例だけでも、白峰方言が他の加賀方言とはかなり異なった特徴をもつ方言であることがわかるでしょう。

変わる白峰の方言

ところで、全国の諸方言が共通語化を中心に大きく変容しつつある現在、白峰方言もまた例外ではありません。特に古い日本語の残存とも言える事象は確実に衰退しています。例えば、30数年前に岩井隆盛氏によって使用が確認されている「地震」の意のナイ、ネーは、最近の調査では理解語（使わないが知っている語）としても全く確認できませんでした。この30年余りの間に白峰方言から完全に消え去ったようです。

以下では、先に紹介した白峰方言の古態性、独自性の中から、それぞれ2つの事象を取り上げ、現在の白峰方言の実態を見てみたいと思います。図表1～4は、金沢大学教育学部国語研究室が1993年夏に白峰村（字白峰、字桑島）で行った調査（筆者と学生17名が参加）のうち、字白峰の結果を示したものです。図表中、左の欄が話者の世代、右側の2つの欄の丸で囲んだ数字が男女別の話者の通し番号です。10歳代の中学生から90歳代まで計58名、世代による人数（男女別の人数も）の偏りはありますが、白峰方言が現在どのように変わりつつあるかがよくわかります。

図表1は先の(1)の事象に関するものです。文献国語史では中世まで中央語（京都語）で使われていたとされるバ行・マ行四段動詞のウ音便は、西日本方言では中国・四国地方の一部と九州・沖縄地方の広い範囲で確認されていますが、北陸地方では、石川の白峰と奥能登、富山の五箇山のみに確認されるものです。図表からはウ音便のヨロコダ、ヨロコダが意外に根強く50歳代以上で今も使用されていることがわかります。一方、共通語や他の加賀方言の影響を受け40歳代以下ではヨロコダに変化しています。

図表2は(2)の事象に関するものです。白峰方言で聞かれるショーファイ、ショーワイは、ポルトガル人宣教師たちによる中世末期の日本語（京都語）の記録である『日葡辞書』（1603年刊）に「シヲハユイ 塩辛いこと、塩味がすること」とあるシヲハユイに由来するものと考えられます。

福井県嶺北地方から石川県加賀地方、そして富山県西部地方で広く使われる北陸共通語とも言えるクドイが全世代に使われている中、ショーファイ、ショーワイもクドイとの併用という形で、やはり50歳代以上でまだ使用されていることがわかります。シオカライ、ショッパイといった共通語的表現はまだほとんど白峰には入り込んでいません。ショーファイ、ショーワイにしても、加賀方言の影響を受けて新しく使われ始めたクドイにしても、シオカライやショッパイにぴったり置きかえられない、どこか少し違う味、そんな気持ちがあるための結果だと思われます。

図表1 喜んだ

年齢	男	女	(凡例)
90歳	① △		△ ヨロコダ ▽ ヨロコダ ● ヨロコダ
80	② ▽	① △	
	③ ▽	② ●	
70		③ △	
	④ △	④ ●	
	⑤ △	⑤ △	
	⑥ △ ●	⑥ △	
	⑦ ●	⑦ △	
	⑧ △	⑧ △	
60		⑨ ▽	
		⑩ ▽	
		⑪ △	
		⑫ △ ▽	
50	⑬ △	⑬ ●	
		⑭ ▽ ●	
		⑮ △ ●	
40	⑯ ●	⑯ ●	
		⑰ ●	
30	⑱ ●	⑱ ●	
	⑲ ●		
20	⑳ ●	㉑ ●	
		㉒ ●	
中学生	㉓ ●	㉓ ●	
	㉔ ●	㉔ ●	
	㉕ ●	㉕ ●	
	㉖ ●	㉖ ●	
	㉗ ●	㉗ ●	
	㉘ ●	㉘ ●	
	㉙ ●	㉙ ●	
	㉚ ●	㉚ ●	
	㉛ ●	㉛ ●	
	㉜ ●	㉜ ●	
	㉝ ●	㉝ ●	
	㉞ ●	㉞ ●	
	㉟ ●	㉟ ●	

図表2 塩辛い

年齢	男	女	(凡例)
90歳	① ▽		△ ショーファイ (ショファイ、ショー ファー、ショーハイ) ▽ ショーワイ (ショーワイ、ショー ワ、ショワイ) ● クドイ (クドイ、クデー) * シオカライ・カライ † ショッパイ
80	② ●	① ●*†	
	③ ●	② ▽ ●	
70		③ ●	
	④ ●	④ △ ●	
	⑤ ●	⑤ ▽	
	⑥ △ ●	⑥ ●	
	⑦ △ ▽ ●	⑦ △	
	⑧ △	⑧ ●	
60		⑨ △ ▽	
		⑩ ●	
		⑪ ▽ ●	
		⑫ ▽	
50	⑬ △ ●	⑬ ▽ ●	
		⑭ ▽ ●	
		⑮ ●	
40	⑯ ●	⑯ ●*	
		⑰ ●	
30	⑱ ●	⑱ ▽ ●	
	⑲ ●		
20	⑳ ●*	㉑ ●†	
		㉒ †	
中学生	㉓ ●	㉓ ●†	
	㉔ ●	㉔ ●	
	㉕ ●†	㉕ ●	
	㉖ †	㉖ ●	
	㉗ ●	㉗ ●	
	㉘ ●	㉘ †	
	㉙ ●	㉙ †	
	㉚ ●	㉚ ●	
	㉛ ●	㉛ ●	
	㉜ ●	㉜ ●	
	㉝ ●	㉝ ●	
	㉞ ●	㉞ ●	
	㉟ ●*†	㉟ ●*†	

図表3は(6)の事象に関するものです。「私」のことをギラと言う何とも不思議な言い方は、全国的にもきわめて珍しいものです。語源もよくわかっていません。「ギラの里白峰」というキャッチフレーズが使われることがあるほど、白峰の人たち自身が白峰方言の象徴のように感じている言葉でもあります。そのせいか、ギラは男性を中心に今もよく使われており、中学生ではギラから発音が変化したギャーという形も聞かれます。ギラ、ギャーは今しばらくは男性を中心に白峰方言を象徴するものとして受け継がれていくと思われます。ただ、その音声的響きが女性に好まれないためか、20歳代以下の女性ではギラは聞かれませんでした。

図表4は(11)の事象に関するものです。「～ている」にあたる～ Cholは中国・四国地方の西から九州地方にかけて広く分布しますが、北陸地方では白峰と富山の五箇山だけに聞かれるものです。白峰では、20歳代以下でこそ加賀方言化した～トルが使われているものの、30歳代以上では男女ともに今も～Cholをよく使っていることがわかります。今しばらくは白峰方言の特徴の一つとして使われ続けることでしょう。

図表3 私(自称代名詞)

年齢	男	女	(凡例)
90歳	① △		△ ギラ ▽ ギャー、ギャ
80	② △	① △	◆ ウラ ● ワタシ
	③ △	② △ ●	
		③ △	
70	④ △	④ △	* ワシ + オレ † ポク
	⑤ △ *	⑤ △	
	⑥ △	⑥ △	
	⑦ △ *	⑦ △	
	⑧ △	⑧ △	
	⑨ △ *	⑨ △	
60		⑩ △	
		⑪ △	
		⑫ △ ●	
		⑬ △	
50	⑭ △	⑭ △ ●	
		⑮ △ ●	
		⑯ ●	
		⑰ △	
40	⑱ △	⑱ △	
		⑲ ●	
30	⑳ ◆	㉑ △	
	㉒ △		
20	㉓ △	㉔ ●	
		㉕ ●	
中学生	㉖ △	㉗ ●	
	㉘ △ +	㉙ ●	
	㉚ △ ▽	㉛ ●	
	㉜ ▽	㉝ ●	
	㉞ ▽+†	㉟ ●	
	㊱ △	㊲ ●	
	㊳ △ †	㊴ ●	
	㊵ ▽	㊶ †	
	㊷ * †	㊸ ●	
		㊹ ●	
		㊺ ●	
		㊻ ●	
		㊼ ●	
		㊽ ●	

図表4 (花が) 散っている

年齢	男	女	(凡例)
90歳	① N		△ チッコル ● チツル † チツイル、チツトル * その他 N 無回答・誤答
80	② N	① N	
	③ ●	② △	
		③ △	
70	④ △	④ △	
	⑤ △	⑤ △	
	⑥ △	⑥ △	
	⑦ △	⑦ △	
	⑧ △	⑧ N	
	⑨ △	⑨ N	
60		⑩ △	
		⑪ △	
		⑫ △	
		⑬ △	
50	⑭ △	⑭ N	
		⑮ N	
		⑯ △	
		⑰ △	
40	⑱ †	⑱ △	
		⑲ *	
30	⑳ △	㉑ △	
	㉒ △		
20	㉓ △ ●	㉔ ●	
		㉕ ●	
中学生	㉖ N	㉗ ●	
	㉘ ●	㉙ ●	
	㉚ ●	㉛ ●	
	㉜ *	㉝ ●	
	㉞ ●	㉟ ●	
	㊱ △ ●	㊲ N	
	㊳ †	㊴ ●	
	㊵ ●	㊶ *	
		㊷ †	
		㊸ *	
		㊹ ●	
		㊺ ●	
		㊻ ●	
		㊼ ●	

白峰方言の将来

以上、白峰方言の特徴的な事象のごく一部について、その変化の実態をご紹介しました。今回の調査結果全体を見渡した場合には、先に述べたとおり、全国の多くの方言が共通語化を中心に大きく変容しつつある中で、白峰方言もまた例外でないことがわかりました。ただ、同時に、最近調査を進めている石川県内数か所の方言に比べて、白峰方言がむしろその特徴を比較的よく残していることもわかりました。このことは、白峰の人たちが、自分たちの方言の特徴を強く意識し、村内での生活のことばとしての白峰方言に愛着を感じ始めていることと無関係ではないと思われます。近年、様々な形で方言が再評価されるようになりましたが、研究者が消えゆく伝統的方言の記録の重要性を強く意識しているのとはまた違った意味で、地域社会の人たちが自分たちの生活のことばである方言に次第に目を向け始めていることは歓迎すべき傾向だと考えています。

白峰村では昨年、20代・30代の若い人たちを中心に、北陸地方では唯一の方言イベントがスタートしました。ことば、特に音声のみの方言は一度消えたら復活することはまず無理ですが、このイベントを契機に、白峰村の人たちの生活にとって大切なことば、必要なことばは、これからできるだけ長く受け継がれていってほしいものだと思います。

<金沢大学教育学部>